
モンスターハンター -The great hunting days!-

天木武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター - The great hunting
days! -

【Nコード】

N7827X

【作者名】

天木武

【あらすじ】

人と、モンスターと呼ばれる巨大な生物が共存する世界。
そこでは「ハンター」と呼ばれるモンスターを狩ることを生業とする人々がいた。

ある者は名声を手に入れるために、ある者はその日の糧を得るために、そしてある者は己の夢をかなえるために――。

これはハンター達の、素晴らしき狩りの日々の物語。

／／／／／

世界観はFが中心です。

主に7・0や8・0あたりまでの設定としていますが、ドンドルマの街がクエスト受注の中心、既にパローネキャラバンが存在する、双剣の鬼人化で強走が解除されない等異なる設定やオリジナルの設定も存在します。

/ / / / /

ブローグ

やっぱり私にはまだ早かったのか――。

そんな弱気な気持ちが一瞬脳裏をよぎる。

その思いに追い討ちをかけるかのように灼熱の火球が私めがけて飛来し、すんでのところで右手の盾でそれを防ぐ。

「ッ！」

直撃は避けても熱までは防ぎきれない。

右手に受ける衝撃と熱に思わず顔をしかめた。

ガードを解き目の前の敵を睨み付ける。

鋭い爪を持つ翼、毒のある棘を持つ尾、2本の脚で大地に立ち、緑の甲殻と鱗に包まれる竜――「陸の女王」雌火竜・リオレイア。

「リオレイアを1人で倒せるようになったらハンターとして1人前」――いつからか、そんな話がハンターたちの間で広まっていた。

だから私は早く1人前と認められたくて来た。

――なのに。

ブレスを吐き終えた頭に突きをひとつ入れて横にステップ、レイアの突進が私の横を抜けるのを確認して弾倉をリロードする。

「ハアッ！」

大きく息を吐き、呼吸を整える。

「強い……」

口から本音が漏れたのも無理はない。

回復薬は全て使い切り、剣士にとって命綱である砥石も残りが少ない。

そのせいで砲撃と竜撃砲が気兼ねなく撃てない。

それも戦いを長引かせている理由の1つだとは思っていた。

「とはいえ、そろそろ決めにかからないと……」

長期戦になればなるほどこちらが不利になる。

焦りながらもレイアの次の手は何か待つ。

焦って先に手を出したら反撃をもらう。

それが私がハンターになって最初のうちに学んだことの1つだ。殊にガンランスにおいてはそれが顕著であり、相手の攻撃を防ぎ、そのあとの隙に攻撃をする、というのがセオリーだった。が、それにも限界はある。

焦りを生み出す心とも戦いながら、獲物の動きを見極めようとする。レイアの体が沈み込み、2歩後ずさる。

（しめた！）

私は内心ほくそ笑んだ。

レイアにとって最強の大技、サマーソルト——その巨体を1回転させ、毒をもつ尻尾で相手をなぎ払う。

しかしそんな大技であるからこそ、出した後に大きな隙ができる。そこに竜撃砲を叩き込む——それで終わらせる。

算段は決まった。

レイア渾身の一撃を受け止めるために右手に力が入る。

『グウオオオッ！』

低いうなり声とともにレイアの巨体が宙に舞い——ギイン！

鈍い音と衝撃、右手の盾がそれを受け止める。

「もらった……！」

竜のブレスの原理を応用したというガンランス最大の奥義・竜撃砲。切り札を発射モーションにし、狙いを定める。

（狙うは頭、この一撃で終わらせる……！）

が、直後のレイアの動きは私の予想を裏切った。着地と同時に再び体が沈みこむ。

「そんな……！2回連続……ッ！」

まずい、竜撃砲は既に発射モーションに入ってしまった。タイミング的に良くみて相打ち、悪ければ……。

「くっ……！死なばもろとも！」

私は覚悟を決めて歯を食いしばり、次に来るであろう衝撃に備えた。

ドドオウン！ ガギャツ！

「ぐ、うあああああつ！」

左手に竜撃砲の反動を感じるのと胸に焼け付くような強烈な痛みが走ったのが同時だった。

そのまま脚が地を離れ背中から岩壁に叩きつけられる。

「カハツ…！」

一瞬息が止まり視界がぼやけ、力なく膝から崩れ落ちた。

「う…う…！」

明滅する視界を凝らし痛む胸に目を落とす。

体を保護していたザザミメイルの一部が腹部から胸部かけて抉り取られ、血が噴き出している。

深手ではあるが致命傷ではない。

しかし本当の問題はそっちじゃない。

「ぐつ、あううつ！」

竜撃砲を撃った直後のガンランスは、ダメージで固定仕切れなかった左腕をすり抜けていた。

その反動で後ろに流された左肩は背中同様岩壁に強打しており、もしやと思ったのだが…。

「やつぱり…折ったか何かした…ッ！痛ッ！」

指1本でも動かそうとすると激痛が走る。

（このままでは武器が握れない、一方的にやられる…！）

が、焦りで顔を上げててもレイアが追撃をかけてくる様子がない。それどころか私に背を向け、脚をひきずりながら離れていく。

「逃げる…？じゃああと一步、あと一步でレイアを倒せる…！」

胸と左腕の痛みを堪えて体を起こし、愛用のスティールガンランスに右手を伸ばした。

——その時だった。

「え…？」

眩暈。

続いて体から力が抜け、入らなくなる。

「しまった…！レイアの…毒…！」

体が言うことを聞かない、目も霞んでくる。

「あと少し…あと少しで…一人前って…認められ…」

視界の端でレイアが羽ばたく様子が見える。

右手にガンランスの感触が伝わりと同時に——私の意識は途絶した。

第1章

——セレーネ。

誰かの私を呼ぶ声が聞こえる。

——セレーネ。

ああ、この声、この感じ…あの人だ、あの人に違いない。

私は顔を上げその人を見上げようとする。

が、霞掛かったようにその顔をはっきりと見ることができない。

——セレーネ、なんであんな危険なことをしたの？

いつか、聞いた言葉。

そう判断するより早く、私の口は勝手に動いていた。

「ねえ、聞いて！今日レイアと戦ったの！あとちよつとのところで逃げられちゃったんだけど…でも、もう倒せる！だから…」

不意に気配が遠ざかっていく。

「ま、待って！もうすぐレイアを倒せる…そしたら一人前って認めもらえるでしょ！？だから待って！ねえ！待って…！」

「痛ッ…！」

胸と左腕に走る激痛で少女は目を覚ました。

目に何か溜まっているような気がする。

（涙…？）

「気づいたようじゃの」

横からかけられた声に反射的に右手で目をぬぐう。

「お主にレイアはまだ早いようじゃ」

胸の痛みを堪えながら少女は身を起こす。

酒と食物の匂いが鼻をつく。

普段は見慣れない場所だが、すぐに大衆酒場の関係者用休憩室にある長椅子に寝かされていたと気づいた。

酒場の方にも他のハンターはいないことに気づくと同時に、怪我人なんだからもうちよつといい場所に寝せてくれてもいいんじゃないかとも少女は思った。

その思いもあつて目を声をかけてきた老人——ギルドマスターと呼ばれている竜人族と言う種族である——に向けた。

「腹と胸がレイアの尻尾でえぐられたようじゃな。鎧の破損状況を見て、もう少し深く入っていたらお主の意識を奪った毒とあわせて致命傷じゃったわい。レイアが逃げるときでよかったの。アイルーたちがすぐにお主を運んで応急処置をしたおかげで助かった。が、それでも危険じゃったんじゃないぞ。何せ数時間意識を失ってたわけじゃない。ああ、治療はうちの女性スタッフがやってくれたから心配はいらん」

胸に痛々しく包帯が巻かれている。

同時に首から左腕が吊るされていることにも気がついた。

「あとは重いのは左腕じゃな。折れとるからその様子だとしばらくは安静にして様子を見たほうが……おい！ 聞いたとるのかセレーネ！」

セレーネと呼ばれた少女はギルドマスターの声を無視するかのよう

に壁にかけてあつた愛用のガンランスと盾を手にとった。

「しばらく……どれだけ待って……というのよ!？」

「セレーネ！」
ギルドマスターからの厳しい声にセレーネは1つため息をつき、ガンランスを背負いながら振り返った。

「……ハンターは体を一番大切にしろ、って言いたいんでしょう？ 私にだってそのぐらいのことはわかってるわよ」

「じゃったら……!」

「でもじいさん、前に言っただけ、私は早く一人前って認められてあの人に近づきたい。だからこうして今ハンターになっているんだもの」

竜人族の老人は一度息を吐いた。

「……お主の気持ちはわからんでもないが、焦りは身を滅ぼすだけ、

禁物じゃ。まずは体を完治させてから、わかったかの？」

セレーネは何も答えず、机の上にある自分が身に着けていたザザミシリーズの防具を手を取った。

「…体の治療のことは感謝してるわ」

そっけなく言うとそのまま背を向け、大衆酒場を後にしていった。

「セレーネ…お主が望んだ道じゃ、わしは何も言わんがの…」

手に持った煙草をギルドマスターはふかしながら呟いた。

ここドンドルマは大陸の中心に位置し、山あいには切り開かれた街である。

竜人族である大長老の指導の下、様々な施設を備えた大拠点であり、シュレイド地方の街に勝るとも劣らない規模となっている。

ここに集まりモンスターを狩猟して生計を立てるもの達は「ハンター」と呼ばれ、ある者は一攫千金を夢見て、ある者はまだ見ぬモンスターと対峙する為に、またある者は己の夢をかなえるために、日々狩りを続けていた。

ドンドルマはモンスターの生息する狩場からは近いとはいえない位置にあったが、パローネ・キャラバンという気球船団からギルドへの技術協力があったおかげで現在では気球による短時間の移動が可能となっていた。

そのドンドルマの一角、居住区画の中にセレーネ・ヴィヴェルドの住む家がある。

セレーネはギルドマスターに言われた通り、完治するまで狩りは行わなかった。

その間体を治療することに専念しながらもモンスターの情報収集、壊れた防具の新調、腕以外が完治した後半には基礎体力の維持のために体を動かすこともしていた。

そして数週間後、スティールガンランスを背負いザザミー式の防具に身を包んだセレーネは大衆酒場へ脚を運んだ。

「お！『一人娘』のセレーネじゃねえか！どうしたい、最近見なかったけどよお！」

大衆酒場にいるハンターの1人がセレーネに声をかける。

「一人娘」というのはいつしか彼女に着いた二つ名だった。

誰に誘われても決して一緒に行こうとしない、1人で狩りをするから「一人娘」。

さつき声をかけてきた男も以前セレーネをしつこくパーティに誘ったがそっけなく断られ、今では諦めてこうして声をかけるだけになっていた。

セレーネはそんなかけられた声も無視し、ギルドマスターの元へと歩を進める。

「じいさん」

「お、セレーネか。…ちゃんと療養したようじゃな。して、今日はどのクエを…」

「言うまでもないでしょ、レイアよ。この間の借りを返させてもらうわ」

その言葉を聞いてギルドマスターは渋い表情を浮かべる。

「お主、まだこの間ので懲りたらんのか？」

「この間、あいつは足を引きずった。あと一歩で勝てた。だから今度は…」

「でもな、その一歩が新人ハンターにとっちゃ大きな壁なんだよ」

予期しない後ろからの声にセレーネは振り返った。

笑みを浮かべて肩やところどころに棘がついた、見た目にも攻撃的な防具に身を包んで太刀を背負う男と、その後ろに一言も発せず赤い防具に身を包み双剣を背負った男が立っていた。

「そうだろ？ギルドマスター？」

「ああ、そうじゃ。お主の言うとおり」

「だからよ、俺がちよっと手伝ってやろうと思ってな」

さらに男はニヤツと笑う。

（…ああ、こいつとは本能的に合わない）

下品な笑いだとセレーネは不快な気分になった。

「何がしたいの？」

「お前さん、リオレイアを倒したいんだろ？でも前回はもう少しのところで失敗した。だったら俺が手伝って…」

「余計なお世話よ」

ピシャツと言い放った一言に男の言葉が思わず止まった。

続けてセレーネは畳み掛ける。

「それにレイアは倒したいけど私は『1人で』倒したいの。悪いけどあんたのおせっかいは必要としてない。邪魔だから帰ってくれろ？」

少しの間男は黙ったが、ゆっくり口を開いた。

「…お前さん、ハンターランクは？」

「…何よ？」

「ザザミは倒しとるがドドブラがまだじゃから…16じゃな」

セレーネの代わりにギルドマスターが答えた。

「なるほどなるほど、それでステイルガンランスか…なるほどね…」

「何が言いたいのよ！はつきり言いなさいよ！」

怒気をはらんだ眼で男を睨みつける。

「落ち着けて。1人で倒したいなら、まず武器を強化するってのがセオリーだ。あんたは今ステイルガンランスを使ってるが、強化が意外とてこずってるからそのままなんだろ？手取り早く強い武器を手に入れるならハンターランクを上げて、よりモンスターの素材から武器を作るって方法がある」

そこまでを言い、セレーネから反論がないのを確認して男は続ける。「つまり、俺が手伝ってやってハンターランクを上げる。で、あんたは自分の得物を強化する。そしたら1人でレイアでも何でもいきやあいい。どうだ？」

「だからそういうのを余計なお世話って…」

「待て、セレーネ」

「…何よじいさん」

首だけを後ろに向けてセレーネは聞いた。

「この若者の言うことも一理ある。レイアと戦いたいという一心でお主はザザミは倒したが、その後はどうじゃ？もう次の公式狩猟試験を受けれるハンターランクじゃ。ここいらでハンターランクを解放してもいいと思うがの。…お主名前は？」

「俺かい？俺はジャックだ。ジャック・イーブ。ちなみに後ろのはウルフって言っらしい」

「よし、じゃあセレーネ受注でお主ら3人でドドブラに行つて来る
といい」

「ちよつとじいさん！余計なことしないで！」

「…セレーネ、お主はそろそろパーティを組むということを学ぶべきじゃ」

言い聞かせるようにギルドマスターは言った。

「ハンターは1人で狩るのもいいが、仲間と協力してこそ、じゃ。

いずれパーティを組むことになる。今のうちに学んでおけ。…よし、3人で契約したぞ」

「ま、そういうことだ。よろしくな。んじゃあちよいと武器変えてくるから待つてくれや」

ジャックといった男はそういうと酒場を一度出て行つた。

その間にウルフといわれた男は無言で受注を終えている。

受注が終わるとセレーネの方へと近づいてきた。

「ウルフだ。俺もハンターランクは20になったばかりだ。よろしく頼む。もつとも、あいつはもつと高いがな」

「…あつそ」

興味なさ気にセレーネは答え、ギルドマスターを睨む。

そんな視線など気にしていないように老人は煙草をふかした。

「待たせたな。さあ行こうぜ」

ジャックが戻ってきた。

さっきまでの太刀と違い、茶がかった、棘が多いものに代わっていた。

「俺の双剣は水、この子は属性なしだ。牙を折るなら…」

「心配すんな。俺が折ってやるよ。ついでにドドブラごとき瞬殺してやる。…セレーネ、お前ドドブラと戦ったことは？」

急に呼び捨てにされたことにますます不快な思いをしたが、もう半分諦めてセレーネは答えた。

「ないわよ。防具のためのザザミと、レイアの練習にクックは多く戦ったけど、あとはドス連中の鳥竜種とババコンガ、ファンゴぐらいよ」

「そうかい。まあガンランスとドドブラじゃ相性よくないがな。武器を変える気は…」

「私はガンランス以外使う気はない」

はつきりした口調にジャックの言葉は一度途切れた。

「…まあいいや。ともかくさっさと倒しちまおう。ホットドリンクはあるな？」

そういえば雪山に行くこと自体初めてだったとセレーネは今頃になって気づいた。

「ドドブランゴは山の上にいる。サクツといつちまうぞ」

ホットドリンクを一気に飲み干し、ジャックは走り出した。

遅れまいとセレーネもホットドリンクを飲む。

雪山の寒さに冷えた体が芯から温まっていくのを感じた。

ウルフはいつの間にか飲み終えたか、セレーネよりも一足早く走り出していた。

雪山、というのはドンドルマのハンター達が呼ぶ通称で、正式には「フラヒヤ山脈」という。

麓には雪山の厳しい環境下で発展してきた「ポツケ村」があり、雪

山に赴くハンター達はここを拠点にしていた。

ガウシカの毛皮を加工したマフモフや、特産物である雪山草を漬けた薬用酒、フラヒヤ麦を蒸留して作るフラヒヤビールはこの村だけならず、ドンドルマでも知る者が多いほど有名である。

そんな雪山草が生える山道を走り抜けると、ドドブラが待つ開けた場所に着いた。

セレーネがドドブラのいる場所に着いたとき、ジャックは早くも一撃をドドブラの頭に振り下ろしていた。

「オラオラア！さつさと来ないと終わらせちまうぜ！」

見た目にも凶悪そうに反り返る刃の太刀を振るいながらジャックは叫んだ。

負けじとウルフ、続いてセレーネがドドブラに走り寄る。

が、顔の前に張り付こうとしたセレーネの目の前にジャックの斬り下がりによる刃が近づく。

思わず攻撃しようとする手が止まった。

「ちよつと！何すんのよ！」

「邪魔だ、顔の前に来るんじゃないねえ！」

ウルフは過去にそういわれたことがあるのか、後ろ足付近に陣取り隙を見て連続攻撃を叩き込んでいる。

「乱舞」と呼ばれる双剣の攻撃方法だ。

先ほどの無愛想な様子と違う華麗な剣捌きに一瞬見惚れそうになったが、気を取り直してセレーネはウルフと逆の脚の位置に陣取るうとする。

が、ドドブラは素早くサイドステップを繰り返して、3人との距離をとった。

「逃げるな…ッ！」

抜刀したままでは機動力が落ちる。

収刀し、距離をつめて突きを繰り返そうとする。

しかし、今度はジャックの太刀が前足に当たったようで、痛がるようにドドブラは転がり、再び距離は開いてしまった。

「こいつ…！」

出発前にジャックに言われたことを思い出した。

『まあガンランスとドドブラじゃ相性よくないがな』

（関係ない、そんなものは技量でカバーできる、カバーする…！）
ぐつと歯を食いしばりもう何度目かわからない追撃。

そのとき、ドドブラが一瞬怯んだ。

「いけるっ…！」

隙を見出したセレーネは竜撃砲のモーションに入る。

だが、前足に入るジャックの攻撃にドドブラが転がり、またしても距離は離れてしまう。

「クソッ…！」

発射間際だった竜撃砲を空撃ちし、舌打ちをする。

と、ほぼ同時にジャックの追撃よって断末魔の咆哮を上げ、ドドブラは息絶えた。

「は！まあこんなもんだな」

満足そうにジャックは太刀を鞘に収め、一方でウルフは無言のまま2本の剣を背負った。

苛立ちを抑えるようにセレーネも武器を収める。

「最後の竜撃砲、惜しかったな？あれで決まったかもしれないのにな」

挑発的な言葉にセレーネはより苛立った。

恨み言が喉まで出かけたが飲み込み、無言で眼をそらした。

「さて、これでハンターランク17になったわけだ。よかったな、セレーネ」

クエストからポケ村の酒場へと帰ってきたジャックの第一声がそれだった。

「んじゃこの調子でガンガンと…」

「もういい」

小さな声で、だがしつかりとセレーネは呟いた。

「あ？」

「もついいって言ったのよ！あんたとは2度とクエには行かない！」
突然の怒鳴り声に酒場にいたハンターの目が集まる。

「な、なんだ！手伝ってやったのにその態度は！」

「私は手伝ってほしいなんて頼んでない！じいさんが勝手に決めたことだし、それにあんなの手伝ったって言わないわ。自分の強さを他人に見せ付けたいだけの、ただのアンタの自己満足よ！私は強くなりたくて狩りをしてるの、あんたのやってることは私にとって迷惑なのよ！」

「何だと…！この女、言わせておけば…！」

ジャックの右手が振り上げられる。

が、意外なことにそれを止めたのはウルフだった。

「やめる。この子の言うとおりだ」

「おい、ウルフ…」

「俺もいつかは言おうとしてたことだったがな。この子のように強くなりたいと願って狩っている者にとってお前みたいな『勇者様』
気取りが一番迷惑だ。…そもそもこのハンターランクのモンスターに、そのカクトスの太刀にアカムト防具じゃ不釣合いだ」

（カクトス…？アカムト…？）

セレーネは何を言っているかわからなかった、ただあの男の武器と防具は見たことがなくおそらく強い、としかわからなかったのにウルフはその素材に使われているモンスターの名前まで出した。

そんなセレーネをよそに、ジャックは今度はウルフに矛先を向ける。

「なんだなんだてめえまで！せっかく俺が手伝ってやってるのに…！」

「悪いが、俺もこの子と一緒に手伝ってくれと頼んだことは一度としてない。お前が半ば無理矢理パーティを組んできたんだろう」

「ウルフ…てめえ…！」

「とにかく、お前のハンターランクならそれ相応の依頼でも受けて来るんだな。…もつとも、そこじやついていけない腕前だから、こ

んなところで油売ってるんだろうけどよ」

怒りが頂点に達したジャックの右手が太刀の柄に掛かったとき、それまで酒場で見ていたハンターの1人がその右手を掴んだ。

「ジャックさん、だつたよな？悪いがこの双剣の旦那の言うとおりだ。話を聞いた限りじゃあんたが悪い。あんたと一緒にクエストに行っても着いていったハンターが伸びない、それはこの子が望んでいることじゃない。ここでこれ以上揉め事を大きくしたくないだろ、さつさと出て行きな。…それともやるってんなら、相手になるぜ？もちろん獲物はなしだ。あんたを俺のハンマーで叩き潰すの面白そうだが、獲物を使つてのケンカはご法度、ハンターの資格を失うのはゴメンだしな」

男の座っていたと思われる席には機械めいたハンマーが立てかけてあり、その向かいに座っている弓を背負った女性ハンターも刺すような視線をジャックに向けている。

それだけでない。

その酒場にいる全員の目が一様にジャックを非難するように降り注いでいた。

「ぐ…」

言葉を失いジャックは右手を柄から離す。

「そうそう、それでいい。…で、続きは外でやるかい？」

「クソツたれ！覚えてやがれ！」

捨て台詞を残し、ジャックが酒場を飛び出していった。

「は、きょうびどの悪党も言わないようなセリフを吐いていきやがったな。だからあいつは三流以下のさ」

ハンマー使いと思われる男はそういうと、やれやれと両腕を広げて自分の席へと戻っていった。

「…礼は」

「言わなくて結構だ。俺はただ腹が立つ男に一言言ってやってすつきりしたただけだからな」

ひらひらと腕を振り、机の上の酒をあおる。

それを契機に酒場の全員が自分たちの時間に戻っていった。

ハア、と1つため息をつき、セレーネは空いている適当な席に座ると、そのときウルフが酒を注文して向かいに座ってきた。

「…なによ、あんたまだ帰ってなかったの？」

「まあな」

「さっき言ったでしょ、もうあんたとは…」

「それはあいつに向かっていったんだろ。それにお前はあんた『達』とは言わなかったしな」

痛いところを突いてくる。

確かにセレーネはそう言った、苛立ちの矛先はジャックに向けてだけであり、ウルフは対象ではなかったからだ。

それよりも彼女にはさっき彼が言ったモンスターのことが気になった。

「…あんた、さっきあいつの武器と防具を見てなんかのモンスターの名前言ったわよね？」

「ん？ああ、エスピとアカムのことか？」

「エスピ？カクトスとかって…。まあいいわ。あんた、ハンターランク20って言ったわよね？多分そのモンスター、私達のランクじや情報すら出回らないと思うけど、なんでそんなこと知ってるわけ？」

ウルフは手元に届いた酒を一杯呷った。

「話すと長くなる。それにお前が知りたいのはそれよりもそのモンスターのことだろ？」

「な、なんで…」

「わかるさ、お前の目がそう言ってた」

「はあ？」

一瞬セレーネはこいつは頭がおかしいのかとも思ったが、はぐらかされただけだろうと決めた。

「まあいいわ。…で、そのモンスターってどんななの？」

「知りたいか？」

セレーネは勢いよく首を縦に振る。

「だっ たら…」

残った酒を一気に飲み干し、ウルフは立ち上がった。

「もう1度俺とパーティを組め。さっきのは俺達の力で、とはいえない。今度は俺達の手でドドブラを狩りに行く」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7827x/>

モンスターハンター -The great hunting days!-

2011年10月21日04時15分発行